

## 調査者と協力者の関係のなかで 生み出されるズレとリアリティ

中 坪 史 典  
(広島大学)

中坪です、よろしくお願いします。私がこれから話す内容は、おそらく私自身の背景だとか、今の研究の関心のようなものと結びつくだらうというふうに思いますので、最初に少し私自身の簡単な自己紹介をさせてください。最初に声を大にして言いたいことですが、私は心理学の専門家ではありません。心理学を全く専門としていない人間でありまして、専門は教育学、幼児教育学です。ただ、私は保育実践のフィールドワークをずっとやっていて、エスノグラフィーとか、そういった質的な研究にとっても関心が高く、この学会には参加させていただいております。

最近の私の関心は、従来の古典的なエスノグラフィーでは、研究者が自分の興味・関心に基づいてフィールドに入り、データを搾取し、論文を書くというような、いわゆるそこでの当事者、インフォーマルな声というものはほとんど研究に反映されてこなかった。そういった反省に立って、私の今の関心は実践者、私の場合で言うと実践者というのは幼稚園の先生や保育士さんになりますけれども、実践者の声を研究に歪曲することなく反映させ、その実践者の知を理論化するような、そういった研究者と実践者のコラボレーションに関心を持っています。

具体的には、最近少し凝って行っているのは、Video-cued Multi-vocal Visual Ethnographyというモデルですけれども、映像を媒体として研究者と実践者が対応する。今日の話でいうと半構造化インタビューですので、調査者と協力者が対面的に対話をするということだと思いますけれども、私が行っているのは映像を一つの媒体として、研究者と実践者が映像を見ながら対

話をしていく、そういうようなことに興味を持っています。つまり、映像を媒介としてお互いに語り合うことで、実践者と研究者が知の共同構築みたいなことをやっていけたらいいなという、そういうような希望を持ちながらやっているところです。

今日は本当に刺激的な内容のシンポジウムで、お三方の興味深い話題提供に私もこうやって参加させていただいたということをごくうれしく思っています。このシンポジウムでの企画趣旨の問いは、どのような話の文脈で、どのような役割の変化が立ちあらわれるのか、という調査者と協力者の相互交流のダイナミックスに焦点を当てるといことがこの企画の趣旨でした。実際に、具体的にお三方の話を聞いてみると、例えばずれとか違和感とか、わからなさとか、みぞという、そういった言葉でそれぞれが表現されていたのかなというふうに思います。これはシンポジウムの趣旨を、ちょっと私なりの言葉に置きかえてみると、どのような話の文脈で、どのようなずれが生じているのかというところを探っていくというのが、このシンポジウムの大きな魅力のかなと個人的には思いました。

そうしたときに、お三方の発表ですけれども、調査者と協力者にずれが生じるときというのは、例えば福田さんの発表に関して言えば、このずれが生じるときというのは文脈転換の契機となるときだというようなお話がありましたけれども、具体的にはそれは、協力者がQOLを考えるとときに困難を感じたときであるとか、調査者が会話の意味をつかめなかった、普通の生活って何、基本的なことって何という会話の意味をつかめなかったときが、ずれが生じたときで、それはもっと言えば、文脈転換の契機になる、そういうお話だったと思います。滑田さんの研究では、調査者の想定概念と協力者が抱く認識が異なるとき、これが、ずれが生じるときなのではないかと考えられます。木戸さんの報告では、語りにくさとかキーワードという話がありましたけれども、調査者の概念の理解の深まりと協力者の間に溝が生じたときであるとか、これは前のバージョンのパワーポイントでは、専門家が対話性を阻害するというような、非常に興味深い言葉があったと思いますけれども、そういうようなときというのが、ずれが生じるときなのだと思えらるか

思います。三者三様、こういったときが、ずれが生じるときなのではないか、そういうようなお話だったと思います。

これらを3人に共通する、ずれ、わかりにくさ、溝って何だろうと、勝手にとても安易なイメージで、自分なりのメタファーを考えてみました。こんなメタファーでいいですかねと、ちょっとお三方に聞いてみたいと思うのですが、ピッチャーとキャッチャーになぞらえて、ここで言う調査者というのはキャッチャーで、協力者というのがピッチャーで、つまり調査者が設定するストライクゾーンに協力者のボールがなかなか来ない。もちろんキャッチャーとしての調査者も、ただ黙ってグローブを、ミットを掲げているだけではなくて一生懸命とろうと動くのだけれども、それでもボールがとれないといったようなときがずれなのかなと思うわけですね。

あるいは、木戸さんが言わんとされている専門家が多様性を阻害するということはどういうことだろう、ということをもう少し深く聞きたいなと思っています。それはもしかしたら調査者が協力者に要求するストライクゾーンが高度になっていくようなとき、もうここに投げなさいといった形で高度になっているときに、お互いのコミュニケーションが阻害されていくという、このようなメタファーで私は考えてみましたけれども、このメタファーでいいのでしょうか、と少し3人に聞いてみたいと思います。

その上でなのですが、今回3人に共通する手法が、半構造化インタビューというものでした。私自身は先ほどの自己紹介の中でも述べた通り、もちろん半構造化インタビューも行うことはありますが、どちらかといえば、おそらく私は非構造化、エスノグラフィックなインタビューというものを行っているんだろうなというふうに思いました。そうしたときに、半構造化インタビューの魅力と困難というものがあるのだろうというふうに思いました。半構造化ですから、当然、半分は調査者の想定概念、先ほどのメタファーでいくとストライクゾーンみたいなものがあり、滑田さんの言葉では聞きたいことというような話、あるいは想定された仮説、調査者が描く仮説を練り上げるためにインタビューを行うという、そういった部分が、半構造化ですから半分はあるのだろうと思います。しかし、半構造化インタビューの魅力は、

他方で調査者の語りほど豊かなものはないといいますが、リアルな語りや生の語り、そういったものも拾い出すというところにも、実は半構造化インタビューの醍醐味があるかと思います。いわゆる先ほど安田さんの指定討論にあったように、調査者と協力者はずれて当然といったようなところがあるわけです。そのずれこそがリアリティーであり、ダイナミックスであるということもまた魅力であり、困難であるということなのかなというふうに思います。

そうしたときに、私の指定討論、ポイントの第1点は、こうしたずれというものは調査者にとって魅力的だったのだろうか、あるいは、やはり研究上なかなか難しい、困難なものとしてとらえたのか、そのずれから何か読み取れたのか、興味を持てたのか、ずれに何かビビビッとくるようなものが何かあったのか、何か全然自分の聞きたいことが聞けていない、どうしようといったようなイメージだったのか、といったことですね、そのあたりをぜひ肌感覚で、そういうようなところの本音を少し知りたいというのが私の1点目の質問です。

あわせて、これも同じ話ですけれども、ずれというのは福田さんの言葉でいうと修正の対象でもあり、共同探求の出発でもあるような、何か修正の対象と共同探求の出発のようなものが表裏一体になっているところがあり、それが何か文脈転換の背後にあるものなのかなというふうに思いました。こうしたどっちもというものが何か重なり合ってるような気もしています。あるいは、やはりずれというものは少ない方が研究的には成功したと、いいインタビューができたというふうに判断するのか、もしそうだと、そもそも研究の成功とは何なのか、そのあたりを聞いてみたいというのが私のポイントの1点目です。

2点目は、3人の協力者との、調査者と協力者の間の関係ですね。ラポールという言葉がいいのかどうかは少し悩んでいます。先ほどの安田さんのお話を聞くと、研究者の立ち位置という表現、そちらの方が何かいいなと思って、その表現に置きかえた方がいいのではないかというふうに思ったのですが、お三方の調査者と協力者の関係、つまり協力者から見ての福田さんとか

滑田さんとか木戸さんはどういった存在だったのかということですが、私にとってはとてもおもしろかったのですが、患者さんにとって福田さんは、医師でもないし看護師でもないし、調査者のような、でも安田さんの言葉でいうところの支援者のような、何かそういったこと、何かよくわからないような存在であることのメリットとデメリットということが多分あるのだらうなと思います。そのあたりを、自分の立ち位置をどういうふうにも内省、振り返ることができるのかどうかをお聞きしたいと思います。

それから、滑田さんと木戸さんは、何か私の中では全く対照的なイメージで、滑田さんにとっての調査者は50代、60代の、自分のお父さんか両親か、もしかしたらそれ以上かもしれない人たち、つまり、協力者にとって滑田さんは何か息子のようなのか、あるいは今どきの若者なのか何なのかわからないですけども、そういった感じですよ。他方で、木戸さんの場合は、協力者から見ると木戸さんは先輩になるかと思います。あるいは化粧の何かプロ、化粧に詳しい人ですし、何か知的できれいなお姉さん、あるいはしっかりメイクが整ったきれいなお姉さんのような、何かそういったイメージにも見えるし、あるいは何か人の心を読み取ることができる有能な心理学者といったところもあるかもしれない、そういった立ち位置ですよ。だから、これは半分冗談で、半分本気ですけども、もし木戸さんがノーメイクで髪ほさほさで、すごくいけてない格好でインタビューをしたら、もっと違う語りが出てくるのだらうかとも思います。

つまり、協力者にとって、やはり調査者によって協力者の語りというものとは異なるのだらうと思いますので、我々も親と会話するとき、友達同士で会話するとき、先生と会話するときというのはおそらく語りが違うわけですから、その協力者の語りというものは調査者によって異なるのだらうというように考えられます。調査者としての自分の立ち位置のようなものをどのように振り返って内省することができるのか、というようにところを聞いてみたいところではあります。ここはこういうふうにもラポールと書きましたけれども、言いたいことはそういった調査者の立ち位置に関わる場所です。以上です。